



平成31年（令和元年）度川俣町立福田小学校学校だより

しらさぎKids NO. 1 4

令和元年 5 月 2 9 日

文責:校長 大内 雅之

川崎の児童等襲撃事件から ～「命を守ること」についてあらためて考える～

28日の朝に飛びこんできた川崎の児童等への襲撃事件。新聞・ニュース等でご存じかとは思いますが、詳細についてはどんどん明らかになることと思いますが、概要は以下の通りです。

28日午前7時45分ごろ、川崎市多摩区登戸新町の路上でスクールバスを待っていた小学生らに男が近づき、刃物で次々と刺した。小学生と近くにいた成人の計19人が襲われ、小学6年生の女児と別の小学生の保護者の男性の計2人が死亡。その他重傷を負った小学生・成人女性がいた。

無差別、しかも子どもが巻き込まれた事件に「またか・・・」という思いがぬぐえません。事件に巻き込まれ亡くなった方のご冥福をお祈りするとともに、体・心に傷を負われた方々の一日も早い回復を祈るばかりです。

今回の事件を契機として、あらためて「命を守ること」について考えてみようと思います。

学校は、なんとしてでも子どもの命を守らなくてはなりません。子どもの命は最優先事項です。学校として命を守ることにに関して、できうる限りのことはこれまでもしてきたつもりですし、これからもしていくことについては何ら変わりはありません。

しかし、一方では、犯罪や災害などに対して子どもたちに「自分の命は自分で守る」ことを伝えてきていますが、果たして、それでいいのか。もっと抜本的な改善がないと子どもの命は守りきれないのでは・・・。明確な答えが出ない問いが頭の中を駆けめぐります。子ども自身が自分の命を守るすべを知り、自分で行動を起こすことは有意義で有効な手立ての一つにはなっていることは間違いないと確信しています。しかし、子どもは、まだまだ未熟で、弱い存在であり、判断力がしっかり備わっているわけでもないのです。その子どもに「自分の命は自分で守るのだ」と力説してきても、今回のような事件が起こってしまうと無力感を覚えるのは私だけではないはずです。平成13年に発生した大阪教育大附属池田小の児童殺傷事件などをきっかけに、学校の安全対策は強化され、地域住民等による通学路の見守り活動も確実に増えてきました。しかし、今回のような事件が起きると・・・やはり「子どもを守るのは難しい」と言わざるを得ません。日本の安全神話の崩壊か・・・。

それでも、子どもの命はなんとしてでも守らなくてはなりません。今回のことは都会でのこと、福島には、川俣には起きるはずがない。などと言えるものではありません。まさしく「自分ごと」です。アメリカなどは登下校での親の送迎は当たり前のことであると聞きます。子どもの命に対して、学校が、家庭が、地域が、何ができるか、行政としての手立ては・・・等もう一度しっかり考え、実行することが求められているように思えるのです。「子どもを取り巻く環境に絶対安全はない」という認識をあらたにし、それぞれの立場で現実的で、具体的行動を起こしていくことが必要ではないだろうかと思うのです。

学校では昨日、学年に応じて、子どもたちに登下校時を含めて、安全な行動について再確認し、「あれっ、なんか変な感じ」と思うような人と出会った場合には、速やかにその場を離れるなどの具体的な行動についても話をしました。ご家庭においても、ちょっと時間をとって子どもたちと是非話し合ってみてください。子どもたちの命を守るために。

